

「国際メトロポリス会議 2016 愛知・名古屋」参加報告書

(計画研究 B01「規範とアイデンティティ：社会的紐帯とナショナリズムの間」)

2017 年 3 月 11 日

文責：福田友子（千葉大学）

2016 年 10 月 24～28 日、愛知県名古屋市で「国際メトロポリス会議 2016」が開催された¹。主催者側によると、「国際メトロポリス会議」は国際的な人の移動と社会統合に関する国際学会の年次大会であり、難民、外国人労働者、留学生、多文化共生について考える機会となる。1989 年以降、20 年以上にわたって欧米の主要都市で開催されてきたが、今回初めてアジアでの開催が実現した。国際学会ではあるが、研究者だけでなく、国や地方自治体の政策担当者、実務家（企業、NGO、弁護士等）の三者によって構成されるのが特徴である。

初日の 24 日はスタディ・ツアーが実施された。コースは複数企画されていたが、愛知県の目玉である「トヨタ自動車の工場見学」の人气が高かった。25～28 日の午前は全体会議（Plenary Session）が設定され、計 8 つのテーマで議論が交わされた。研究者、政策担当者、実務家による多様な報告が並ぶ中、UNHCR、IOM、世界銀行等の国際機関の政策担当者や研究者の発言も注目を集めた。25～27 日の午後はワークショップが設定された。参加者が個々にグループを作り、企画を提案する形で実施され、最終的に 50 件余りのワークショップが提供された。

本プロジェクトのメンバーは、26 日午後のワークショップを 2 枠連続で使い、計 6 件の報告を行った。前半と後半の共通テーマは、”Situation of Refugees and their search for Co-existence in the host countries”（難民の状況とホスト国における共生の模索）であり、オーガナイザーは酒井啓子（千葉大学）である。

1 枠目では、難民の送に関わる報告が並んだ。第 1 報告は、池田載子（大阪赤十字病院国際医療救援部²）である。報告題目は”Required medical aid in the areas affected from the Syrian conflict”で、シリア紛争被害者に対する看護支援の活動報告であった。赤十字国際委員会が 2014 年にレバノン北部のトリポリで開設した武器創傷外科トレーニングセンターでの活動事例が紹介された。第 2 報告は、錦田愛子（東京外国語大学）である。報告題目は”Migration in desperation: Palestinians' move to EU countries”で、レバノンからヨーロッパを目指すパレスチナ難民、および受入国であると同時に送出国でもあるレバノンの状況に関する報告であった。目的地（北欧）に到着できなかった失敗事例も示し、難民当事者の視点を提供した。第 3 報告は、Muhammad Omar Abdin（東京外国語大学）である。報告題目は”Sudan: The Unusual Destination for Syrian Refugee”で、大量の国内避難民を抱えるスーダンが、新たにシリア難民を受け入れる上での諸課題を取り上げた。

¹ <https://metropolis2016-nagoya.jimdo.com/>

² <http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>

2 枠目は、難民の受入と多文化共生に関する報告である。第 4 報告は、今井宏平（アジア経済研究所）と Metin ÇORABRTIR（The Research Center on Asylum and Migration, Turkey³）の共同報告である。報告題目は”How has Turkish NGO responded to Syrian refugee issues?”で、トルコ政府によるシリア難民対策および難民の状況について報告した。今井は問題の概要を提示し、トルコにおけるシリア難民急増の背景に、両国間の査証相互免除協定があったことなどを紹介した。Metin はトルコの難民支援 NGO の代表で、日々刻々と変化するシリア難民の待遇について詳細に報告した。第 5 報告は、家田修（北海道大学）である。報告題目は”Another referendum in Hungary on migrants: European Integration in Crisis?”で、ヨーロッパの難民受入と排除の思想に関する報告であった。2016 年 10 月にハンガリーで実施された移民割当の是非を問う国民投票を素材として、東欧の視点から難民と欧州統合問題を論じた。第 6 報告は、福田友子（千葉大学）である。報告題目は”Muslim Societies in Japan: Migrants, 'Refugees', and Ethnic Businesses”で、日本のムスリム移民に関する報告であった。日本の難民受入数は極めて限られているが、その枠外で滞在するムスリムの経済移民の中にも、難民に近いケースが見られることを示した。

ワークショップは 10 企画が同時並行で提供されたため、オーディエンスを集めるのが困難だったが、本プロジェクトは 2 枠連続だったこともあり、15～20 名と比較的多数のオーディエンスを集めた。質疑応答も活発に行われ、レバノン、スーダン、トルコにおける諸課題について、具体的な質問が多数出されたほか、ハンガリーや日本における移民・難民の排除の方向性について率直な疑問が投げかけられた。

³ <http://www.igamder.org/ENGLISH/>